

## シカゴ自由運動再考(上) -運動の組織化からブラック・パワーの台頭まで-

武井 寛

### A Reconsideration of the Chicago Freedom Movement Part I: From the Mobilization of Ordinary People to the Impact of Black Power

TAKEL, Hiroshi

#### はじめに

1960年代中頃までにアメリカ合衆国（以下、アメリカと略記）の人種関係には大きな変化が起きていた。南部における法的人種差別の撤廃を目指した公民権運動は、1964年公民権法と1965年投票権法の成立に結実した。ところが1960年代以降、北部や西部では都市を中心に雇用、住宅、教育などの分野で人種問題の改善に取り組んでいた黒人たちの活動が目立つようになっていた。都市部では黒人に対する警察の偏見に満ちた対応や小さな衝突から暴動へと拡大し、人種暴動は深刻な社会問題となっていた。北部や西部の都市では南部の法的人種隔離は少なかったが、黒人に対する雇用差別や住宅差別など社会生活における人種差別は蔓延していた。1965年にロスアンジェルスのワッツ（Watts）地区で起こったワッツ暴動は、1965年投票権法が成立してわずか5日後に起きたため、人種関係が改善に向かっていると信じていた人々に大きな衝撃を与えた。公民権法の成立により一定の成果を勝ち得た後に、北部や西部の都市の社会問題に注目が集まり、アメリカ社会は新たな局面を迎えていたのである。

本論文の分析対象となるシカゴ自由運動（Chicago Freedom Movement, 以下 CFM と略記）は、シカゴの運動組織であったコミュニティ団体調整会議（Coordinating Council of Community Organization, 以下 CCCO と略記）が、マーティン・ルーサー・キング・ジュニア（Martin Luther King, Jr.）率いる南部キリスト教指導者会議（Southern Christian Leadership Conference, 以下 SCLC と略記）に協力を依頼して1965年から始まった運動である。シカゴでは1954年のブラウン判決以降、公立学校の人種隔離撤廃を求めた運動が活発に展開されていた<sup>1</sup>。多様なグループが公立学校の問題に取り組み、それらを束ねる団体として CCCO は1962年に創設されたが、運動はなかなか進展しなかった。その結果ついに外部の力を導入することになり、公立学校の問題だけでなく、社会的・経済的な問題にも対処することを目指して CFM は始まった。つまり、CFM は CCCO によるシカゴの地方レベルでの活動の延長線上に始まった運動であり、SCLC にとっては初めて北部で本格的に展開する運動であった。

CFM に関しては、キングが初めて本格的に北部に介入した公民権運動のため、これまでも研究が蓄積されてきた。CFM に参加したアラン・B・アンダーソンとジョージ・W・ピッカリングは CFM を失敗した運動と捉えつつも、南部で取り組んできた法的人種隔離の撤廃を目指した公民権運動と、北部の雇用や住宅などの質の異なる問題への取り組みの違いが運動を困難にしたことを強調している。ジェームズ・R・ラルフ・ジュニアは、CFM を公民権運動の転換期に起こった運動と位置付けて精緻に検証しつつも、キングを中心にした公民権運動の一つとして肯定的に

評価している。藤永康政は、アメリカ社会が多様な変化を遂げていく中で行われた CFM の「重層的状況」を明らかにする一方で、それを通じていかに黒人・白人双方の人種意識が高まったかという人種概念の構築過程にも注目している。川島正樹は、これまでの公民権運動研究を踏まえた上で CFM を再考し、現代的な教育と雇用の問題などのその後のシカゴの歴史も含めて考察している。近年の研究では、当時者たちのインタビューをもとに CFM を考察したものや、CFM 後のシカゴの住宅問題を検討した研究なども出てきている<sup>2</sup>。

以上のような CFM に関する最近の研究動向を踏まえた上で、本論文では CFM を北部での重要な公民権運動と位置付けると同時に、シカゴにおけるより広義の住宅をめぐる問題として同運動を捉え直す。CFM を単なる北部の公民権運動や「キングの運動」として捉えることによって、シカゴの政治機構、コミュニティ団体や黒人社会の特徴といった様々なシカゴ独自の要素は後景に退き、それ以前から起きていた黒人の活動、黒人の流入に反対する白人、そして行政府の動向が見えてこなくなる。従来の研究では運動の方向性が変化した点は指摘されているが、運動の標的がなぜ住宅になったのか、その要因はあまり注目されていなかった。結論を先取りすれば、住宅をめぐる対立は歴史的にもシカゴの人種関係を常に刺激した問題であり、シカゴの政治制度に挑戦するテーマであった。だからこそシカゴ市長リチャード・J・デイリー (Richard J. Daley) は、徹底的に CFM に抵抗したのである。本論文では CFM をキングが北部で行った最初の公民権運動と見なすのではなく、シカゴにおける公営住宅政策、黒人コミュニティの形成、都市再開発、そして学校の人種隔離撤廃運動といった、シカゴという都市空間における黒人の歴史の延長線上にある問題として検証する。本論文は、先行研究ではほとんど使用されていない CCCO の活動を記録した一次史料を用いて、CFM における「スラム撲滅」運動とブラック・パワー (Black Power) について主に分析する<sup>3</sup>。

CFM を再考する本研究は上下二部に分けられるが、前半を検討する本論文の構成は以下の通りである。まず第一節で「スラム撲滅 (End Slums)」を掲げた CFM が、シカゴの問題をどのように把握し、いかにして人々の組織化に取り組んだか考察する。CFM では SCLC が北部の黒人社会の生活、政治家と黒人市民の関係、スラム住人の考えなど、複雑な北部社会の特性を理解することが重要であったが、この組織化の困難さと問題点に注目する。第二節では、「スラム撲滅」運動の失敗要因を検討する。「スラム撲滅」運動を困難にした要因は複数ある。その諸要因の分析を通して、「スラム撲滅」運動の中で重視された運動の組織化が、CFM の中ではいかに困難であったかを明らかにする。第三節では、CFM が思うように進まない中で、南部において登場したブラック・パワーについて考察する。当時のアメリカ社会ではブラック・パワーを暴力的な叫びと捉える傾向が強かったが、多くの研究が明らかにしているように、ブラック・パワーは決して暴力を提唱するものではなかった。本節ではブラック・パワーがいかなる歴史的脈で登場したのかを明らかにした上で、それを公民権運動の内部から生まれた既存の運動への批判として考察する。第四節ではブラック・パワーが CFM に与えた影響を考察する。多様なかたちで展開されたブラック・パワーを定義するのは困難であり、本節ではブラック・パワーの主張が CFM とキングに与えた影響に焦点を絞って検討する。以上の検討を通して本論文は、住宅問題へと争点を明確化していくまでの CFM の活動とその問題点を明らかにする。

## 第一節 組織化の取り組み

CCCO から協力を求められた SCLC は、1965 年 9 月頃から CCCO と連帯してこれから行うシ

カゴでの運動の構想を練ることになった。キングは以前から予定されていた講演などの多忙なスケジュールのため、年内はその準備に直接関わることは少なく、SCLCの代表としてジェームズ・ベヴェル (James Bevel) に全権が委ねられた<sup>4</sup>。何よりも SCLC としては、シカゴの社会状況を把握することが必要であり、現地に赴いて運動基盤を整えることが重要だった。それゆえ、ベヴェルはウエスト・サイド (West Side) に SCLC の拠点を置き、運動の戦術を模索したのである。

ベヴェルがウエスト・サイドに SCLC の拠点を置いた理由は二つあった。第一に、1964 年に結成された多様な人種・宗教的な特徴を持つウエスト・サイド連合 (West Side Federation, 以下 WSF と略記) がベヴェルを歓迎し、協力したことである。ベヴェルの組織能力は高く評価され、教会との繋がりを中心に基盤が築かれていたことも軽視できない<sup>5</sup>。第二の理由はシカゴの黒人コミュニティの歴史的特徴に見出される。サウス・サイド (South Side) の黒人コミュニティは、歴史的に黒人エリートの影響力が強い地域であり、ウィリアム・L・ドーソン (William L. Dawson) 連邦下院議員のような黒人政治家が権力を掌握していた。ところがウエスト・サイドの黒人コミュニティは、1950 年代以降に急速に拡大したために、サウス・サイドと比べて歴史が浅かった。また、ウエスト・サイドは人種差別を経験的に理解している南部で生まれた黒人が多く、SCLC の活動が適用し易いと思われた<sup>6</sup>。まさに拠点をどこにするかという問題は、シカゴの黒人社会の歴史的要因が大きく作用していたのである。

SCLC が最初に力を入れた活動はシカゴの黒人大衆の組織化であったが、CCCO が目指す運動とは異なり、両者の運動に対する姿勢は必ずしも一致していなかった。ベヴェルは CCCO がゲットーの住民との連帯が欠如していると感じており、運動には貧しい人々も動員するべきであると考えていた。学生非暴力調整委員会 (Student Nonviolent Coordinating Committee, 以下 SNCC と略記) での経験が有り、CFM ではアメリカフレンズ奉仕団 (American Friends Service Committee, 以下 AFSC と略記) で活動していたバーナード・ラファイエット (Bernard Lafayette) もベヴェルと同意見で、草の根の活動によって黒人を組織する過程で目的と戦術が見えてくると訴えた。それに対して CCCO のアルバート・レイビー (Albert Raby) は、黒人大衆の組織化も大事だが、効果的で明確な計画が運動にとって重要であると主張した<sup>7</sup>。SCLC の大衆を動員するという考え方は、過去の運動の経験によって裏打ちされていた。しかし、同じ大衆を動員するにしても、SCLC のように一部のリーダーによって、争点を「劇的に描く (dramatize)」戦術と、SNCC が提唱していたように普通の人々を運動に参加させる「参加民主主義 (participate democracy)」は根本的に異なる。南部の公民権運動では、この運動の戦術をめぐって SCLC と SNCC がしばしば対立することもあった。CFM では、SNCC による度重なる SCLC 型の戦術への批判を考慮に入れて活動していたことがわかる<sup>8</sup>。

運動の基本方針をめぐる SCLC と CCCO の相違は、SCLC の中心的哲学である非暴力に対する理解にも表れていた。CCCO にとって SCLC の非暴力思想は新しい戦術であった。ベヴェルは非暴力の哲学を戦術ではなく、キングのように生き方として捉えていた人物である。彼は CFM を非暴力運動として展開することを望んでいた<sup>9</sup>。非暴力思想による抵抗手段は、過去にシカゴでも人種平等会議 (Congress of Racial Equality, 以下 CORE と略記) によって用いられていた。しかし、SCLC のような黒人牧師主導による南部的なやり方は、すでに多様なグループによって構成されていた CCCO にとって適応し難いものであった<sup>10</sup>。CCCO が SCLC に期待したのは明らかにキングの影響力であり、シカゴに注目を集めさせて問題を流動化させることであった。ところが、キングのシカゴ不在のまま進められた 1965 年秋以降の準備期間は、方針が不明確なまま運動が

進んでいたのである。

ウエスト・サイドでベヴェルを中心に活動が展開されていた間、サウス・サイドではジェシー・ジャクソン (Jesse Jackson) が CFM としての活動を行っていた。南部での活動経験が豊富な彼は、黒人人口の多いケンウッド (Kenwood) とオークランド (Oakland) で、ケンウッド・オークランド・コミュニティ協会 (Kenwood-Oakland Community Organization, 以下 KOCO と略記) を創設し、キングがシカゴ入りする前の活動基盤を築いていた<sup>11</sup>。ジャクソンの功績の一つとしてあげられるのは、シカゴの黒人教会に協力を呼びかけたことである。フェローシップ・バプティスト教会のクレイ・エバンズ (Clay Evans) は、ジャクソンに促されて CFM に参加した。北部都市の黒人教会は南部ほど黒人の生活と密接に関わっていないが、それでも各コミュニティで影響力を保持していた。この教会ネットワークは、後の職業斡旋や賃上げを目指した「パンかご作戦 (Operation Breadbasket)」の土台となる。ところが、実際には多くの黒人牧師は、運動に対して冷淡な態度を取っていた。キングや SCLC を南部からの「よそ者」と見なして、自分達がシカゴで築いてきた名声を奪う存在と捉える黒人牧師もいた。こうした黒人牧師は運動に協力することによって、それまで市の権力者や黒人政治家から享受してきた恩恵を失うことを恐れていたのである<sup>12</sup>。

1966 年に入ってキングが積極的に参加できるようになったことで、CFM は本格的に始動した。「CFM」という名称はこの頃から使われるようになる。レイビーとキングによって、1月5日に「シカゴ計画 (Chicago Plan)」として知られる計画書が発表された。キングは SCLC が南部で培った社会変化に対する「論点を具体化すること (the crystallization of issues)」と「行動に集中すること (the concentration of action)」という二つの原則について説明し、シカゴの問題とは経済的搾取以外何ものでもないという認識を示した<sup>13</sup>。「シカゴ計画」では教育や不動産業を含んだ 12 項目の問題点があげられ、SCLC はこれらの全ての問題に対処していくと主張した。南部では論点が入種隔離の一点に集約されているため、問題を単純化させて挑むことができた。ところが北部では、根本的な問題を経済的な問題と捉えつつも最初から複数の問題に対処せねばならず、極めて困難な状況からの出発であった。CFM の最初の活動は、「スラム撲滅」をスローガンに、ゲットーの住民を組織化するためのスラム撲滅連合 (Union to End Slums) を設立することから始まった。しかし、記者会見での質疑応答では運動の目的とこの計画の具体性の欠如が指摘され、キング自身も返答に窮していた<sup>14</sup>。この時点の CFM の見通しは、運動の状況によって目的を決定する楽観論で占められていたのである。

リチャード・デイリー市長の存在はキングがシカゴに惹かれた一つの要因であった。キングはシカゴを支配するデイリーの絶対的な権力が、運動にとっていつか有利になると考えていた。また、デイリーは過去に SCLC がシカゴで資金調達のために集会を開いた時に、キングを支持していた。ところが、デイリーの相談役を務めていたシカゴ人間関係委員会 (Chicago Commission on Human Relations, 以下 CCHR と略記) の委員長エド・マーシニアック (Ed Marciniak) によると、デイリーは CFM の活動がデイリーの政治基盤に悪影響を与えないように、キングの運動を最小限にとどめようと慎重に対応していたという。彼が最も注意を払ったことは、南部で起きたような市当局対デモ隊の衝突という二項対立によって、市当局が運動を妨害する立場に陥らないようにすることであった。キングが以前シカゴに来た際にもマーシニアックが空港まで出迎えるなど、市当局はキングの運動を支持する姿勢を示した。このような演出は、市当局がスラムを存続させているという疑いを牽制するのに十分であった<sup>15</sup>。

CFM は準備不足と理念が不明確であったことは否めず、黒人コミュニティの組織化はキング

がシカゴ入りした後も順調に進んだとは言えなかった。キングは妻のコレッタ (Coretta) を連れてシカゴのウエスト・サイドに赴き、過去の運動を通して初めて現地にアパートを借りて住み込んだ。これはキングが黒人の組織化に本気で取り組む姿勢を示している<sup>16</sup>。キングとベヴェルは「スラム撲滅」運動の一環として、ウエスト・サイドのイースト・ガーフィールド・パーク (East Garfield Park) 地区の教会で大衆集会を開き、その地域に根付いた活動を目指した。集会后、同地区では20以上のコミュニティ団体から構成されるイースト・ガーフィールド・パーク・スラム撲滅連合 (East Garfield Park Union to End Slums、以下 EGPUES と略記) を創設して、スラム状況の改善を目指した。しかしキングの期待とは裏腹に、たとえ多くのコミュニティ団体が参加していても、EGPUES の活動は住民の関心を引き寄せることはできなかった。少人数のスタッフとボランティアだけで展開するコミュニティ活動は困難であり、アパートを一軒ごとに訪ねていく地道な活動は時間と気力を必要とした。小規模な活動は運動の発展を遅らせ、大々的に注目を集めることもなく、活動家を落胆させていたのである<sup>17</sup>。

運動を本格的に開始して4ヶ月が過ぎても、目的と標的を明確にできない CFM は深刻な状況に陥っていた。北部の社会状況を十分に把握せずにシカゴ入りした事情もあったが、1月に「シカゴ計画」を発表した時は、包括的な問題に取り組むことで焦点が絞られてくると SCLC は考えていた。しかし、黒人大衆の組織化は達成されず、活動の焦点を絞る必要があった。運動が順調に進まない中、SCLC は CCCO が現状を改善する確固とした信念で団結した団体ではないとみなすようになっていた<sup>18</sup>。多様なグループから構成される CCCO の活動は、共通の認識を育むことが難しく、総意が得られにくい。また、いくつかのグループは市当局や市のビジネスマンと何らかの関係を有し、利益を共にする場合もあった。このような多様で複雑な関係を持つシカゴの社会は、キングが経験した南部の状況とあまりにも異なっていた。そして、緩やかに進む活動は運動内の士気を低下させていたのである。

## 第二節 「スラム撲滅」運動の失敗要因

CFM でこれまで取り組んできた「スラム撲滅」運動の成果は乏しく、複数の要因が運動の組織化を困難にしていた。最大の要因はデイリー市長と、彼の命令のもと黒人コミュニティを牛耳っていたドーソンの存在であった。ドーソンは、まるで機械 (マシン) のように忠実に従うことから名付けられた黒人マシン (Black Machine) を使って、黒人コミュニティを掌握していた。デイリーは CFM によって、デイリー対キングという対立構図になることを避け続けた。彼は黒人マシンを用いて、CFM から人々の関心をそらす戦略に出た。SCLC がウエスト・サイドで「スラム撲滅」運動を始めた時、デイリーは黒人市議会議員ラルフ・メトカフ (Ralph Metcalfe) を責任者に任命し、市当局独自のスラム撲滅運動を始めたのである。メンバーは黒人議員、黒人判事、黒人公務員、黒人弁護士、黒人聖職者など、全てデイリーと繋がりのある黒人エリートで構成されていた<sup>19</sup>。デイリーは市当局主導のスラム撲滅運動について、「キング博士のように、我々全員がスラムを排除する努力を行っている」と述べ、スラム排除は現在のシカゴ市当局の最優先事項であり、他のどの都市よりも多くのことを成し遂げてきたと訴えた<sup>20</sup>。デイリーが強調した点はキングと敵対するのではなく、市当局の活動とキングの活動を同列に語り、市当局もスラム撲滅に取り組んでいる姿勢を示すことにあった。デイリーは CFM の努力を打ち消し、黒人を CFM から遠ざけることを狙ったのである。伝統的に黒人選挙区だった地域から黒人が引越してしまったら、長年そこで安定していた黒人票を失うことになる。また、黒人マシンも SCLC がシ

カゴに来たことで、シカゴの黒人に自分達以外のリーダーシップを与えてしまうことを恐れていた<sup>21</sup>。そして黒人が白人地域に入居すれば白人は郊外へ移動してしまい、もう一つの重要なマシン基盤である都市部の白人票を失うことになる。つまり、デイリーが死守しようとしたものはこの票田であり、CFMはデイリーにとってまさに彼の政治生命を脅かす存在であった。

CFMに反対した黒人政治家がドーンソンや黒人マシンならば、黒人牧師の中で最も強く反対したのは、サウス・サイドにシカゴ最大の黒人教会を持つジョセフ・H・ジャクソン (Joseph H. Jackson) であった。全国バプティスト会議 (National Baptist Convention, USA, Inc., 以下NBCと略記)の議長であるジャクソンは、シカゴの人種関係は良好だと捉えていた。彼は法と秩序を重視し、全国黒人地位向上協会 (National Association for the Advancement of Colored People, 以下NAACPと略記)の法的手段によって黒人の生活を改善する方法を支持していた。この信念に加えてキングと個人的に不仲であったジャクソンは、シカゴのバプティスト派の黒人牧師に圧力をかけてCFMを妨害したのである<sup>22</sup>。これまでの公民権運動において黒人教会は不可欠な存在であったが、CFMでは黒人教会が運動の推進力にならなかった。ただし、ジョセフ・H・ジャクソンの圧力が及ぶサウス・サイドでも、クレイ・エバンズ、ニュー・フレンド・バプティスト教会のストーリー・フリーマン (Story Freeman)、グレイター・マウント・ホープ・バプティスト教会のW・L・ランバート (W. L. Lambert) は、彼らの教会を集会場として提供するなど、CFMを支持した。彼らは他の牧師と異なり、サウス・サイドの政治家から独立していたために圧力に屈することはなかったのである。このような黒人バプティスト派の牧師は、南部の公民権運動においてキングを支持した人々であり、CFMでも積極的に協力した。また、彼らが力を入れていた「パンかご作戦」は成果を達成できた数少ない活動であった<sup>23</sup>。

市議会議員や牧師によるCFMへの批判以外にも、最も重要な黒人市民の反応も運動を停滞させた要因の一つである。キングがウエスト・サイドに住み始めた時、黒人住民はキングを歓迎していた。ところが、この時の住民の反応は生活状況をキングが改善してくれるかもしれないという期待の表れであった。SCLCとCCCOもスラムの問題の根幹は経済的な問題であると認識していながらも、教育、雇用、住宅といった複数の問題が混在する中でどれから着手すべきか決断できなかった。住民の間では、本当にキングは市当局相手にスラムを改善することができるのだろうか、という不安が募り始めていた<sup>24</sup>。活動の主体となるべく黒人住民は、キングの来訪によって改革意識を高めてCFMに参加するかに見えたが、そうした人々は一握りであった。EGPUESは同地区の住宅環境改善を目指したが、EGPUESに参加する近隣住民は少なく、活動は挫折することになる。こうした組織化活動はSCLCが得意とするものではなく、実際に組織化に従事していたスタッフも困惑していたのである<sup>25</sup>。

運動に対する黒人住民の姿勢以外に「スラム撲滅」運動を困難にした要因は、コミュニティ団体の性質にある。コミュニティ団体は人種、エスニシティ、階級、宗教など社会的・文化的な要素を基盤に形成され、特定の地域で社会生活に関わる問題に対して集団的行動を起こす<sup>26</sup>。しかし、CCCOは既存のコミュニティ団体が緩やかに繋がった集合体であったため、具体的な行動を選択する時に総意は得にくかった。ウエスト・サイド協会 (West Side Organization, 以下WSOと略記)のチェスター・ロビンソン (Chester Robinson) は、コミュニティに恩恵がある範囲でCFMに協力していた。また、キングの北部での運動に懐疑的だったソウル・アリンスキー (Saul Alinsky) とアーサー・ブレイジャー (Arthur Brazier) のウッドローン協会 (Temporary Woodlawn Organization, 以下TWOと略記) は、CFMで取り組んでいる問題をCFMの問題ではなく、ウツ

ドローンのコミュニティの問題と捉えて活動していた<sup>27</sup>。このように、各団体の思惑の相違はそのまま活動に対する姿勢に反映していた。したがってCFMは、いまだシカゴ計画で発表した「論点を具体化すること」をできていなかった。

本来運動の主体となるべき黒人住民の非協力的態度と、分散した関心というコミュニティ団体の性質が「スラム撲滅」を滞らせた要因である。こうした状況はSCLCの参加以前からCCCOが陥っていた難題であり、SCLCによって運動を流動化させるというCCCOの狙いは達成できなかった。SCLCはシカゴの人種差別に全国的な注目を集めることを目的としながらも、忍耐強く運動の組織化を図っていたが、それはSCLCの得意とする活動ではなかった。また、運動の組織化は注目を集めることも少なく、これ以後CFMの戦術はいかに問題を可視化させるかが重視されていく。その結果、「スラム撲滅」のスローガンから郊外住宅の人種統合を目的とした「住宅開放」へとスローガンを変更した。それは藤永の言う「ゲッターの内側を向いた運動」からの方向転換であり、問題を「劇的に描く」SCLC型の戦術への傾倒であった<sup>28</sup>。

### 第三節 ブラック・パワーの主張とその背景

近年、ブラック・パワーに関する研究では、ブラック・パワーを一つの運動体と捉えて新たに問い直そうという主張がなされている。これまでもブラック・パワーに関する議論は、思想や黒人文化への影響など多岐に渡り、その定義は論者によって異なっていた<sup>29</sup>。近年の研究では公民権運動とブラック・パワーを分断と捉えるのではなく、その連続性や相互関連性を強調し、双方の関係を再考する必要性を強調している<sup>30</sup>。本節では、CFMの停滞している時期に南部で登場したブラック・パワーが台頭した背景とその主張の内容を考察する。

1966年6月5日、黒人青年ジェームズ・メレディス（James Meredith）は「恐怖に対抗する行進（March Against Fear）」と題して、テネシー州メンフィスからミシシッピ州ジャクソンまでの単独行進中に、白人人種差別主義者に狙撃された。その後SCLCのキング、SNCCのストークリー・カーマイケル（Stokely Carmichael）、COREのフロイド・マッキシク（Floyd McKissick）を中心に、メレディスの意志を継いで行進を継続した。このメレディス行進の中から、ブラック・パワーは誕生した。ブラック・パワーという言葉のインパクトは、既存の公民権運動に不満を持つ黒人を魅了した<sup>31</sup>。またブラック・パワーは、非暴力を説くキングが参加していたメレディス行進の中で登場したことで、さらに大きな印象を与えたのである。

キングが無視できないほど人々に影響を与えたブラック・パワーは、突如登場した黒人の叫びではなく、それを生んだ背景にはSNCCが歩んできた過去の経験があった。パワーを獲得する必要性は、ジョン・ルイス（John Lewis）が議長を務めていた時代からSNCC内で議論されていた。1963年8月のワシントン行進の時に、彼は演説の草案でパワーについて「力の源泉を創造する（create a source of power）」という言葉を用いて、行動を起こさないケネディ政権を批判しようとした<sup>32</sup>。ところが、ルイスの草案はカトリック系団体から反対にあい、公民権団体からも運動の結束を理由に削除するように指摘された。白人・黒人双方からの圧力によって発言を制限されたことにルイスは不満を抱き、SNCCのメンバーはルイス以上に上から押しつける態度に怒りを抱いていた。演説自体が権力を持つ側から否定されたことにより、パワーを獲得しようとする意識はSNCCの中でさらに高まった。ルイスは非暴力が絶大な力を持つと確信していたが、メンバーの中には経済的・政治的な変化を起こすためには、非暴力的抵抗だけでは不十分だとする急進的な意見が出始めていた<sup>33</sup>。また、新たに創設されたミシシッピ自由民主党（Mississippi Freedom

Democratic Party, 以下 MFDPP と略記) は 1964 年に南部の民主党と闘うが、キングを含めた公民権団体の妥協案によって失敗に終わった。度重なる公民権団体と政府の妥協を目にし、政府と既存の公民権団体に対する SNCC の不信は決定的なものへと変わった<sup>34</sup>。

SNCC がブラック・パワーを提唱する背景には、当時の国際情勢と国内の人種問題を重ね合わせた見方が次第に SNCC の中で広がっていたことも影響している。1965 年のベトナムに対する北爆開始とアメリカ南部で未だに投票権が確保されていない現実に、当時多くの SNCC のメンバーが矛盾を感じていたと、SNCC のクリーブランド・セラーズ (Cleveland Sellers) は後に語っていた。彼らにとって、ベトナムとアメリカ南部で起こっていることは、権力を持つ側の暴力的な行為であり同じ問題であった。また、1964 年のハーレム暴動と 1965 年のワッツ暴動は、SNCC にとって無視できない問題となり、黒人のエネルギーを何かに向けなければならないと彼らは考えていた。さらに、1964 年に SNCC の代表団がアフリカ諸国を訪問し、独立運動やアフリカ人の自立した政治を目の当たりにした時に、代表団はアメリカでも黒人はパワーを獲得しなければならないと確信した<sup>35</sup>。このように当時の国内外の社会情勢が、SNCC のメンバーのパワー認識を刺激していたことは間違いない。

ブラック・パワーの背景には SNCC の経験が反映されていたが、カーマイケルの講演や著作、さらに彼に関する研究書からいくつかのブラック・パワーの基本的概念を見出せる<sup>36</sup>。第一に、カーマイケルは黒人が自己を自ら再定義しなければならないという。黒人は白人社会から規定された呼び名である「ニグロ (Negro)」を否定し、自らを「アフリカン・アメリカン (African-Americans)」、「アフロ・アメリカン (Afro-Americans)」、または「ブラック・ピープル (black people)」と呼ぶべきであると彼は訴える<sup>37</sup>。カーマイケルは、黒人の自己肯定が心理的平等を得るために必要不可欠であるとして、その重要性を強調した。そして黒人性の肯定と共に重要なことは、自分達の起源であるアフリカの歴史的・文化的な遺産を学び、伝承することであるという。

第二に、カーマイケルは黒人の連帯を説いた。過去の公民権運動では、多くの黒人指導者が黒人大衆の声を反映しておらず、彼は中産階級に属する政治家や黒人知識人を批判した<sup>38</sup>。またカーマイケルは、自分自身も含めて黒人指導者がゲッター住民の声を代弁するような活動を行っていないと考えていた。これらの地域の黒人を組織して、黒人による黒人のための組織を築いて権力を獲得していかなければならない。そのために黒人は連帯していかなければならないとカーマイケルは主張した<sup>39</sup>。

第三に、カーマイケルは黒人による黒人コミュニティの組織化を強調した。カーマイケルはこれを「T. C. B. (take care of business)」と呼んだ<sup>40</sup>。黒人の持つあらゆる政治・経済的なパワーを結集して、黒人コミュニティは黒人が支配しなければならない。そのために、黒人は投票権を用いて自分達で選んだ黒人政治家を政治の場に送り、人種差別的な政策を廃止するべきである。そうすることによって、自分達の支払う税金で教育環境の改善も可能になる。経済面においても、黒人の購買力を利用して、黒人コミュニティで消費することをカーマイケルは提案した。カーマイケルはコミュニティ精神を重視し、協同組合的な概念を採用することを説いたのである<sup>41</sup>。この点で彼の主張は黒人の自助努力を通して黒人コミュニティを改善する立場をとっていた。

ブラック・パワーはこのような黒人性の肯定、黒人の連帯、そして黒人コミュニティの組織化を基本概念としていた。黒人による黒人の組織という主張は本質主義的であり、メディアでも分離主義的傾向が強調されて反白人的な思想と批判された。元々 SNCC は白人と黒人を中心に構成された組織であり、強制的に白人を排除したわけではなく、統合の可能性も完全に否定したわ



けではなかった。白人の SNCC メンバーにはブラック・パワーの精神を説明して、彼ら・彼女らに白人コミュニティを組織することを提案した。つまり、SNCC は従来の統合主義を拒絶したのであった。白人 SNCC メンバーはカーマイケルの意向を理解したが、彼らは公民権運動から遠ざかり、そのエネルギーはベトナム反戦運動へと流れていった<sup>42</sup>。

ブラック・パワーは黒人大衆に熱狂的に支持されたが、黒人の間でもその受け止め方は様々であった。曖昧な定義はブラック・パワーに対する認識の不一致を招き、黒人の間でも混乱を生じさせた。多くの白人の間ではブラック・パワーを暴力と同一視し、否定的な反応が起こった。リベラル派の政治家として知られていた副大統領ヒューバート・ハンフリー (Hubert Humphrey) もブラック・パワーを批判した。また、黒人の中では支持する声も多数あったが、ブラック・パワーは NAACP と全国都市同盟 (National Urban League, 以下 NUL と略記) を中心に強力な反対にあった<sup>43</sup>。メディアはブラック・パワーを否定的に報道し、公民権運動は分裂していると喧伝されたのである。

#### 第四節 シカゴ自由運動に対するブラック・パワーの影響

南部で登場したブラック・パワーは瞬く間に全米に知れ渡り、大きな論争を招いた。それはシカゴの黒人に対して、黒人であるという自己意識とパワーを獲得することの意味を再考させる契機となった。CFM がなかなか進展しないことも重なり、ブラック・パワーは CFM の指導者にも衝撃を与えた。何よりもブラック・パワーは SCLC が絶えず唱えてきた非暴力に挑戦し、キングはこれに答えていかなければならなかった。

キングはブラック・パワーを批判したが、他の批判者とは異なり一定の価値を認めつつブラック・パワーの主張を熟考していくものであった。キングは、ブラック・パワーとは人種差別を永続化させる白人権力への怒りと黒人中産階級に対する失望の叫びと捉えていた。連邦政府がとった行動はあまりにも小規模なものであり、この約束と履行の間に大きな溝があることに黒人は気づいたとキングは理解したのである。また、キングはブラック・パワーが NAACP など黒人中産階級にも同様に異を唱えたことも見過ごさなかった<sup>44</sup>。シカゴで実際に体制内に組み込まれた黒人政治家を見てきた経験から、キングは黒人の生活改善を妨げる白人側に荷担する黒人に対して、ますます批判的になっていた。

カーマイケルが提唱するブラック・パワーについて、キングは次の二点を積極的に評価していた。第一に、ブラック・パワーは政治・経済的な力を結集しようとする黒人への呼び掛けであるとキングは解釈した。彼は黒人がパワーを所有していないことと、多くの黒人がそれを欲している現状を認識していた。しかし、キングは黒人コミュニティを黒人が支配しなければならないという、分離主義的な文脈で語られるブラック・パワーには反対した。キングはパワーの概念に愛の概念を取り入れて説明するが、ブラック・パワー支持者は愛を説く彼の道徳的な立場に立脚した戦術に懐疑的だった<sup>45</sup>。第二に、キングが支持したのは黒人性の肯定である。キングはブラック・パワーを人間性に対する心理的な呼び掛けであると受け止めていた。黒人は劣っているという心理的教化への反発は、黒人の精神を解放するためには不可欠であると主張した。事実、キングは「ブラック・パワー」のスローガンの代わりに「黒人の自覚 (black consciousness)」や「黒人の平等 (black equality)」を提案し、黒人性 (= blackness) を肯定した。黒人の自尊心を回復させ、黒人は邪悪で醜いという概念を否定する努力が必要であるとキングは考えていた。ただし、黒人の自尊心を回復する為には単なる感情的なスローガンではなく、具体的な行動が要求されると彼は捉えてい

た。人種関係の改善を望む黒人・白人の同胞を混乱させ、黒人を孤立させる意味を含んだスローガンは、偏見を持った多くの白人に好都合な自己弁護を与えてしまう危険性があった<sup>46</sup>。黒人性の肯定を支持しつつも、キングはブラック・パワーの伝え方に懸念を抱いていたのである。

ブラック・パワーを肯定的に評価する一方で、キングが最も強く反対したブラック・パワーの概念は暴力と分離主義の二点であった。ブラック・パワーには意識的にせよ無意識的にせよ、暴力的な呼び掛けが内包されているとキングは理解していた。すなわち、防御のための暴力と攻撃のための暴力の境界線は非常に脆く、非暴力主義を取る立場では、全く別の見地から自己防衛を考えなければならないとキングは考えていた<sup>47</sup>。キングは非暴力抵抗を唯一の方法であるという前提で議論し、ブラック・パワーを批判した。ところが、カーマイケルが挑戦したのはまさにこの非暴力抵抗そのものであった。カーマイケルの暴力に関する立場は「必要があれば」という限定されたものであった。SNCCの戦闘的なメンバーはマルコム X (Malcolm X) から思想的影響を受けていたが、彼らの多くは黒人大衆が日常的に脅迫や殺害される南部での生活から、自衛的暴力を運動の選択肢の中に組み込んでいたのである<sup>48</sup>。

ブラック・パワーが黒人分離主義の信念を表していたことに対して、キングは暴力と同じくらい反対していた。彼は黒人が直面する問題は黒人だけの問題とするのではなく、アメリカ社会全体がより大きな経済的正義に向けて、新しい方法を考えなければ解決できないと捉えていた<sup>49</sup>。ブラック・パワーのように人種を強調する言説は、時代と逆行しているとキングの目には映ったのである。また、キングは SNCC の黒人分離主義の背景を 1964 年の「ミシシッピ夏期計画」に見出した。北部から来た優秀な白人が黒人を圧倒したことへの心理的な反発が、ブラック・パワーを生み出したとキングは解釈した<sup>50</sup>。

ブラック・パワーがキングに与えた重要な思想的影響は、キングに黒人性の肯定を強く意識させたことにある。キングは自身の非暴力とブラック・パワーの主張の「統合 (synthesis)」を計った。それは結果的にキングの非暴力的抵抗の姿勢も急進化させ、「戦闘的非暴力 (militant nonviolence)」という言葉で現れていくようになる<sup>51</sup>。ブラック・パワーの台頭によって、非暴力の戦術は批判と再考を迫られた。キングはあくまでも暴力を否定していたが、黒人の忍耐の限界も理解していた。そして、ブラック・パワーからの問いかけによりキングの視野は拡大し、彼はブラック・パワーを非難するだけでは十分ではないと結論付けたのである<sup>52</sup>。しかし、例えキングが当時ブラック・パワーに一定の理解を示していたとしても、ブラック・パワーに代わる明確な戦術を提示することはできなかった。むしろキングは非暴力を死守することに専念していた。その結果、キングは自身の非暴力抵抗に戦闘性を付加しなればならなかった。

ブラック・パワーの主張は、CFMに参加していた黒人も魅了していた。CFMに CORE として参加していたリンダ・ブライアント・ホール (Linda Bryant Hall) は、シセロにデモ行進を行うなど、キングに対してさらに戦闘的な戦術をとる必要性を主張するようになった。また、あまりにも多くの人々が黒人は改革を急ぎ過ぎているとか、歩調を遅くしろと言うたびに彼女はブラック・パワーに惹かれていった。ブラック・パワーには、その言葉自体に人々の心に訴えかける力があつた<sup>53</sup>。彼女のように、運動の協調を説きながらもブラック・パワーを支持する活動家はシカゴでも増えていた。それは SCLC の運動戦術を批判し、運動内部からの変革を問うものであった。この公民権運動の再編という点において、ブラック・パワーを支持する CFM の活動家はカーマイケルの主張と一致していたのである<sup>54</sup>。また、より長い時間軸で考えると、ブラック・パワーに惹かれるシカゴの黒人は、過去の自分たちが経験したことへの不満も表していた。彼らは、ドー

ソンなどの黒人政治家達が彼らの声を代弁していないと捉えていた。こうした経験も踏まえた上で、シカゴの黒人は自らパワーを獲得する意識を高めていたのである。

全国都市同盟のシカゴ支部（Chicago Urban League, 以下 CUL と略記）のハロルド・M・バロン（Harold M. Baron）は、1956年にシカゴの黒人社会を調査し、黒人がパワーを獲得できない根本的な問題は、政策決定者の不在であると結論づけた。バロンによると、シカゴは他の北部都市に比べて政策決定の立場にある黒人は多いが、黒人が占めている地位は「名目的な代表（token representation）」でしかないという。特にこうした「名目的な代表」は、連邦政府の職よりもシカゴ市政に多く、重要な政策決定の役職にまでは就いていないとしている。さらに重要な事実として、政策決定の地位にいる黒人の内枠は、民間機関の2.5倍も多く公的機関についており、民間機関での黒人の政策決定力不足を指摘する<sup>55</sup>。民間機関での政策決定力の無さは、建築、金融業、専門職と多岐に渡っていた。これらの分野は住宅や教育といった、今までシカゴの黒人が改善を試みてきた問題に影響力を行使できる。その分野において黒人の政策決定者が欠けていたために、たとえ運動によっていかに問題点を顕在化させても、それらの問題に対処する能力を持つ勢力が存在していなかったのである。

以上のように、ブラック・パワーは過去の公民権運動の戦術を問い直す、公民権運動の内側からの変革として現れたものであった。そしてキング自身も、単にブラック・パワーを拒絶する NAACP や NUL の黒人指導者とは距離を置いて、ブラック・パワーに対応していた。しかし、キングはブラック・パワーの代わりとなるビジョンを明確に提示できず、むしろ非暴力を擁護し、それをさらに高めていく方向を選んだ。実際にブラック・パワーが叫ばれた後に、リング・ブライアント・ホールが黒人の結束を強調したように、CFM に反対し、直接対決する勢力は CFM 内部から生まれることはなかった。その後、こうした黒人の声を取り込みながら、CFM は運動を可視化させていくことになったのである。それが「住宅開放」運動であった。

## おわりに

CFM で最初に取り組んだ「スラム撲滅」運動の最大の難問は、具体的な争点をあげて行動に集中できなかったことにある。SCLC は、ベヴェルを中心にスラムの問題をシカゴの活動家と協力しながら把握しようと努力した。しかし、これまで活動してきた南部と北部の大都市であるシカゴでは、人口、法律や条例、そして黒人コミュニティの特徴など様々な面において異なっていた。黒人マシンの存在や保守派の黒人牧師など、黒人社会一つにしてもシカゴは複雑であり、CFM はなかなか進展しなかった。特に黒人を動員する地道な活動は、SCLC が得意とするものでなく、CCCO が SCLC に求めていたものでもなかった。したがって、たとえキングがシカゴで生活し始めたとしても、スラムの黒人コミュニティを組織化して人々を動員するには、公民権団体の根気と時間、さらに長期的なビジョンが必要であった。もちろん、CFM が発表した「シカゴ計画」の「論点を具体化すること」と「行動に集中すること」は正しい原則であった。しかし、包括的に様々な問題に取り組み、論点を一つに集中することが出来なかったことは、「スラム撲滅」運動の重大な失敗要因であった。

CFM を困難にしたもう一つの要因は、したたかな対応でキングたちと接したデイリー市長の存在である。デイリー市長はキングの影響力を理解しているがゆえに、南部の警察のような人種偏見を露呈し、暴力的にデモ隊を取りしめるような対応をせず、市当局対公民権運動団体という構図を作らせなかった。この問題の二項対立的な図式化に持ち込ませなかった点で、デイリー市

長の戦術や政治権力がキングや公民権運動団体より優れていたと言える。また、一部の黒人エリートと市当局との利害関係も存在していたため、CFMはコミュニティ団体との信頼関係の構築や協力を積極的に得られなかったのである。

1966年にスラム住人の動員やコミュニティ活動の最中に台頭したブラック・パワーは、あきらかにCFMに影響を与えていた。本論文で指摘したように、ブラック・パワーは公民権運動内部から立ち上がったものであり、公民権運動に対する一種の異議申し立てという側面があった。すなわち、過去の運動を通じた黒人の経験が、ブラック・パワーの叫びにつながったのである。そうであるからこそ、キングはブラック・パワーの主張に耳を傾け、ある点では理解を示しつつもブラック・パワーの問題点を指摘し、非暴力に対する批判に応答したのである。ブラック・パワーとの対話を通してキングの考えも深化し、CFMでもより戦闘的になっていった。後に出てくるシセロへのデモ行進も、CFMの決意を表している証拠である。シカゴの黒人にとって、シセロはシカゴの住宅差別の象徴とも言える場所であった。そこへのデモ行進を交渉カードに用いた点で、黒人側の決意が表れている。以上のような過程を経て、CFMは地道な活動の多い「スラム撲滅」運動から「住宅開放」運動へと目標を変えた。それにより運動はより可視化され、人種差別主義者の暴力が露呈しやすい活動へと変更していくのである。この住宅問題への取り組みは、郊外のより良い住宅を求めた権利の問題だけでなく、公平な住宅を求め続けてきたシカゴの黒人の歴史的な課題の結果でもあった。

本研究はJSPS科研費15K16858の助成を受けたものです。

<sup>1</sup> 武井寛「北部都市における公立学校の人種隔離撤廃運動——一九六〇年代のシカゴを事例にして——」『一橋社会科学』5号（2008年12月）、213-236頁。

<sup>2</sup> Alan B. Anderson and George W. Pickering, *Confronting the Color Line: the Broken Promise of the Civil Rights Movement in Chicago* (Athens: University of Georgia Press, 1986); James R. Ralph, Jr., *Northern Protest: Martin Luther King, Jr., Chicago, and the Civil Rights Movement* (Cambridge: Harvard University Press, 1993); 藤永康政「シカゴ・フリーダム・ムーヴメント—転換期のブラック・アメリカと<人種>の再構築—」『歴史学研究』758（2002年1月）、16-32頁; 川島正樹『アメリカ市民権運動の歴史—連鎖する地域闘争と合衆国社会—』（名古屋大学出版会、2008年）、356-429頁; Robert B. McKersie, *A Decisive Decade: An Insider's View of the Chicago Freedom Movement During the 1960s* (Carbondale: Southern Illinois University Press, 2013); Mary Lou Finley, Bernard Lafayette Jr., James R. Ralph Jr., and Pam Smith, eds., *The Chicago Freedom Movement: Martin Luther King, Jr. and Civil Rights Activism in the North* (Lexington: University Press of Kentucky, 2015)。

<sup>3</sup> 藤永「シカゴ・フリーダム・ムーヴメント」、注12、30頁。藤永がすでに指摘しているように、CFMに関するまとまった史料はない。しかし、CFMの中心人物の一人、シカゴ大学のアルビン・ピッチャー（Alvin Pitcher）の個人ペーパー（Alvin Pitcher Papers）がシカゴ大学に保存されており、そこにはCCCOの史料がある程度まとまって残っている。本論文はこの資料を中心に、他の一次史料や二次文献をもとに分析する。

<sup>4</sup> “Program of the Chicago Freedom Movement,” July 1966, box 5, folder Chicago Freedom Movement, Demands and Goals, Alvin Pitcher Papers（以下APPと略記）, Special Collections Center, Regenstein Library, University of Chicago; Ralph, *Northern Protest*, 44.

<sup>5</sup> Ralph, *Northern Protest*, 44, 48; Anderson and Pickering, *Confronting the Color Line*, 176.

<sup>6</sup> Arnold R. Hirsch, *Making the Second Ghetto: Race and Housing in Chicago, 1940-1960* (1983; Chicago: University of Chicago Press, 1998), 5-9, 193-194; Adam Cohen and Elizabeth Taylor, *American Pharaoh, Mayor Richard J. Daley: His Battle for Chicago and the Nation* (New York: Back Bay Books, 2000), 359-360; 武井寛「都市再開発の黒人コミュニティへの衝撃—20世紀中葉のシカゴ、ウエスト・サイド—」『国際社会研究』2号、（2011年9月）、41-72頁。

<sup>7</sup> Al Raby, “Proposals for Coordinating and Serving Member Organizations and the Chicago Freedom Movement,” box 3, folder CCCO 1966-1967, APP; Anderson and Pickering, *Confronting the Color Line*, 177-178, 185-186.

<sup>8</sup> SNCCからの批判や「参加民主主義」の考え方については以下を参照。Ella Baker, “Developing Community Leadership,” in Gerda Lerner, ed., *Black Women in White America* (New York: Vintage Books, 1973), 345-352; Cheryl Lynn Greenberg, ed., *A Circle of Trust: Remembering SNCC* (New Brunswick: Rutgers University Press, 1998), 96-99; Howell Raines, *My Soul is Rested: The Story of the Civil Rights Movement in the Deep South* (New York: Penguin Books,

1983) , 213-214.

<sup>9</sup> Randall L. Kryn, "James L. Bevel: The Strategist of the 1960s Civil Rights Movement," in David J. Garrow, ed., *We Shall Overcome: The Civil Rights Movement in the United States in the 1950's and 1960's vol.2* (New York: Carlson publishing Inc., 1989) , 517-535.

<sup>10</sup> Anderson and Pickering, *Confronting the Color Line*, 185.

<sup>11</sup> William H. Chafe, *Civilities and Civil Rights: Greensboro, North Carolina, and the Black Struggle for Freedom* (New York: Oxford University Press, 1980) , 125-126, 130-147; Adam Fairclough, *To Redeem the Soul of America: The Southern Christian Leadership Conference and Martin Luther King, Jr.* (Athens: University of Georgia Press, 1987) , 285; Ralph, *Northern Protest*, 66-67.

<sup>12</sup> "Phase I: Orientation and Indoctrination," box 3, folder CCCO 1966-1967, APP; C. Eric Lincoln and Lawrence H. Mamiya, *The Black Church in the African American Experience* (Durham: Duke University Press, 1990) 208-212; Marshall Frady, *Jesse: The Life and Pilgrimage of Jesse Jackson* (New York: Random House, 1996) , 195-200; *Chicago Defender*; February 5-11, 1966, April 16-22, 1966; Lori Gail Waite, "Overcoming Challenges and Obstacles to Social Movement Mobilization: The Case of the Chicago Freedom Movement," (Ph.D. diss., Northwestern University, 1998) , 152-163.

<sup>13</sup> "A Proposal by the Southern Christian Leadership Conference for the Development of a Nonviolent Action Movement for the Great Chicago Area, (以下 A Proposal by the SCLC と略記)" in Clayborn Carson et al., eds., *The Eyes on the Prize, Civil Rights Reader: Documents, Speeches, and Firsthand Accounts from the Black Freedom Struggle 1954-1990* (New York: Penguin Books Inc., 1991) , 291-292; *Chicago Defender*; December 18-24, December 25-31, 1965.

<sup>14</sup> "A Proposal by the SCLC," 295-297; David J. Garrow, *Bearing the Cross Martin Luther King, Jr., and the Southern Christian Leadership Conference* (New York: William Morrow, 1986) , 456-457; *Chicago Defender*; January 8-14, 1966.

<sup>15</sup> Cohen and Taylor, *American Pharaoh, Mayor Richard J. Daley*, 337-338; Garrow, *Bearing the Cross*, 433-434; Ed Marciniak Interview in Henry Hampton and Steve Fayer with Sarah Flynn, eds., *Voices of Freedom: An Oral History of the Civil Rights Movement from the 1950s through the 1980s* (New York: Bantam Books, 1990) , 303.

<sup>16</sup> *Chicago Defender*; January, 22-28, 1966; Coretta Scott King, *My Life with Martin Luther King, Jr.* (New York: Holt, Rinehart and Winston, 1969) , 276, 279.

<sup>17</sup> "West Side Christian Parish Executive Director's Report," February 10, 1966, box 1, folder 3, Chicago West Side Christian Parish Collection (以下 CWSCPC と略記) , Special Collections and University Archives, Richard J. Daley Library, University of Illinois at Chicago (以下 SCUA-RJDL-UIC と略記) ; Mary Lou Finley, "The Open Housing Marches Chicago Summer '66," in David J. Garrow, ed., *Chicago 1966: Open-Housing Marches, Summit Negotiations and Operation Breadbasket* (New York: Carlson Publishing Inc, 1989) , 5-6.

<sup>18</sup> Garrow, *Bearing the Cross*, 470-471; Anderson and Pickering, *Confronting the Color Line*, 192-193; Alvin Pitcher, "The Chicago Freedom Movement: What is It?" in *Chicago 1966*, 155-159.

<sup>19</sup> Cohen and Taylor, *American Pharaoh, Mayor Richard J. Daley*, 353-354. 黒人マシーンは市民の間で著名な黒人であったが、決して政治的手腕に優れている人物ではなかった。ラルフ・メトカフは元オリンピック選手で、クラウド・ホルマン (Claude Holman) は著名な弁護士であり、ロバート・ミラー (Robert Miller) は有名なビジネスマンであった。また、デイリーは宗教的なつながりも重視し、黒人マシーンのメトカフ、ウィリアム・シャノン (William Shannon)、ジョセフ・ロビシヨウ (Joseph Robichaux) はデイリーと同じカトリックであった。

<sup>20</sup> *Ibid.*, 363.

<sup>21</sup> Waite, "Overcoming Challenges and Obstacles to Social Movement Mobilization," 135-144; William J. Grimshaw, *Bitter Fruit: Black Politics and the Chicago Machine, 1931-1991* (Chicago: University of Chicago Press, 1992) , 108-112, 132-133.

<sup>22</sup> Peter J. Paris, *Black Religious Leaders: Conflict in Unity*, rev. and 2d. ed. (Louisville: Westminster/John Knox Press, 1991) , 43-44; Lewis V. Baldwin, *There Is a Balm in Gilead: The Cultural Roots of Martin Luther King, Jr.* (Minneapolis: Fortress Press, 1991) , 206-224; 黒崎真「アメリカ公民権運動における教会の役割再考」『アメリカ史研究』31号(2008年)、77-80頁。

<sup>23</sup> Frady, *Jesse*, 195-200; *Chicago Defender*; February 5-11, April, 16-22, 1966; Waite, "Overcoming Challenges and Obstacles to Social Movement Mobilization," 152-163; Linda Bryant Hall Interview in *The Eyes on the Prize, Civil Rights Reader*, 312.

<sup>24</sup> *Chicago Defender*; February 5-11, February 19-25, March 26 -April 1, 1966.

<sup>25</sup> "West Side Christian Parish Board Meeting," February 21, 1966, box 1, folder 1, CWSCPC; Mary Lou Finley, "The Open Housing Marches," 5-6.

<sup>26</sup> "Mobilization Plans," March 1966, box 44, folder 5, Church Federation of Greater Chicago Records (以下 CFGCR と略記) , Chicago Historical Museum, (以下 CHM と略記) ; Bernard O. Brown, *Ideology and Community Action: The West Side Organization of Chicago, 1964-67* (Chicago: Center for the Scientific Study of Religion, 1978) , 3-10, 16; John Hall Fish, *Black Power/White Control: The Struggle of the Woodlawn Organization in Chicago* (Princeton: Princeton University Press, 1973) , 23-28, 92.

<sup>27</sup> Sanford D. Horwitt, *Let Them Call Me Rebel: Saul Alinsky, His life and Legacy* (New York: Alfred A. Knopf, Inc., 1989), 468-470; Fish, *Black Power/White Control*, 32-114; Brown, *Ideology and Community Action*, 14-48.

<sup>28</sup> 藤永「シカゴ・フリーダム・ムーヴメント」、20頁。

<sup>29</sup> William L. Van Deburg, *New Day in Babylon: The Black Power Movement and American Culture, 1965-1975* (Chicago: University of Chicago Press, 1992) ; John T. McCartney, *Black Power Ideologies: An Essay in African American Political Thought* (Philadelphia: Temple University Press, 1992) ; Joyce Ladner, "What 'Black Power' Means to Negroes in Mississippi," *Trans-action* 5, no. 1 (November 1967) : 7-15.

<sup>30</sup> Peniel E. Joseph, *Waiting 'Til the Midnight Hour: A Narrative History of Black Power in America* (New York: Henry Holt & Company, 2006) ; Peniel E. Joseph, ed., *The Black Power Movement: Rethinking the Civil Rights-Black Power Era* (London: Routledge, 2006) ; Matthew J. Countryman, *Up South: Civil Rights and Black Power in Philadelphia* (Philadelphia: University of Pennsylvania Press, 2006) ; Jeffrey O. G. Ogbar, *Black Power: Radical Politics and African American Identity* (Baltimore: John Hopkins University Press, 2004) ; 藤永康政「ブラック・パワーの挑戦とアメリカン・リベラリズムの危機—デトロイトの黒人ラディカルズとニュー・デトロイト委員会の活動を中心に—」『アメリカ史研究』35号(2012年)、42-43頁。

<sup>31</sup> Clayborne Carson, *In Struggle: SNCC and the Black Awakening of the 1960s* (Cambridge: Harvard University Press, 1981) , 209; Martin Luther King, Jr., *Where Do We Go from Here: Chaos or Community?* (New York: Harper & Row, 1968) , 29 [猿谷要訳『黒人の進む道 [復刊]』明石書店、1999年、32頁] ; Kuwame Ture (Stokely Carmichael) Interview in *Voices of Freedom*, 291.

<sup>32</sup> John Lewis, "Original Text of Speech to Be Delivered at the Lincoln Memorial," in *The Eyes on the Prize, Civil Rights Reader*, 164.

<sup>33</sup> Carson, *In Struggle*, 93-94; John Lewis with Michael D'Orso, *Walking with the Wind: A Memoir of the Movement* (New York: Harcourt Brace & Company, 1998) , 221-228.

<sup>34</sup> Carson, *In Struggle*, 111-174; Chana Kai Lee, *For Freedom's Sake: The Life of Fannie Lou Hamer* (Urbana: University of Illinois Press, 1999) , 61-102; Barbara Ransby, *Ella Baker and the Black Freedom Movement: A Radical Democratic Vision* (Chapel Hill: University of North Carolina Press, 2003) , 330-356.

<sup>35</sup> Greenberg, ed., *A Circle of Trust*, 155-156; Carson, *In Struggle*, 135-136, 192, 216-217.

<sup>36</sup> Stokely Carmichael, "What We Want," in *The Eyes on the Prize, Civil Rights Reader*, 282-286; Stokely Carmichael and Randolph Blackwell, "Black Power: The Widening Dialogue," *New South* 21, no. 3 (Summer 1966) : 65-80; SNCC, "Position Paper on Black Power," in Manning Marable and Leith Mullings, eds., *Let Nobody Turn Us Around: Voices of Resistance, Reform, and Renewal* (Lanham: Rowman & Littlefield Publishers, Inc., 2000) , 448-453; Peniel E. Joseph, *Stokely: A Life* (New York: Basic Civitas Books, 2014) ; James H. Cone, *Martin and Malcolm and America: A Dream or a Nightmare* (New York: Orbis Books, 1991) , 228 [梶原寿訳『夢か悪夢か・キング牧師とマルコムX』日本基督教団出版局、1996年、313頁] ; 黒崎真「M. L. キング、Jr. とブラック・パワー」『欧米文化研究』第12号(1995年)、35-38頁。

<sup>37</sup> Kwame Ture (formerly known as Stokely Carmichael) and Charles V. Hamilton, *Black Power: The Politics of Liberation* (1967; reprint, New York: Vintage Books, 1992) , 34-39; Carmichael and Blackwell, "Black Power," 66.

<sup>38</sup> SNCC, "Position Paper on Black Power," 450.

<sup>39</sup> Carmichael, "What We Want," 282-283; Carmichael and Blackwell, "Black Power," 69.

<sup>40</sup> Ture and Hamilton, *Black Power*, 178-185.

<sup>41</sup> Carmichael, "What We Want," 285-286.

<sup>42</sup> Carson, *In Struggle*, 217; SNCC, "Position Paper on Black Power," 449-450; David Dawley Interview in *Voices of Freedom*, 294; Constance Curry et. al., *Deep in Our Heart: Nine White Women in the Freedom Movement* (Athens: University of Georgia Press, 2000) , 30-31, 164-165.

<sup>43</sup> "Meet the Press," in The Student Nonviolent Coordinating Committee (SNCC) Papers, 1952-1972 (Sanford: Microfilming Corporation of America, 1982) , reel 2; Carson, *In Struggle*, 218-224; Paul Good, "A White Look at Black Power," *Nation*, August 8, 1966, 112-117; *NYT*, July 6, 1966, July 7, 1966; *Chicago Defender*, July 2-8, 1966. ハンプリーはブラック・パワーを直接言及しなかったが、その文脈からブラック・パワーを指していることは明らかであった。

<sup>44</sup> *NYT*, July 9, 1966. SNCCのメンバーの中には、NAACPだけではなくSCLCに対しても同様に嫌悪感を持つ者もいた。

<sup>45</sup> King, *Where Do We Go from Here*, 36-38. [猿谷訳『黒人の進む道』、39-41頁。]

<sup>46</sup> *Ibid.*, 31. [同上、34頁。]

<sup>47</sup> *Ibid.*, 55-56. [同上、58-89頁。]

<sup>48</sup> Greenberg, ed., *A Circle of Trust*, 159-161, 169; Carson, *In Struggle*, 192; Robert F. Williams, *Negro with Guns* (New York: Marzani & Munsell, 1962; reprint, Detroit: Wayne State University, 1998) ; Timothy B. Tyson, *Radio Free Dixie: Robert F. Williams and the Roots of Black Power* (Chapel Hill: University of North Carolina Press, 1999) .

<sup>49</sup> King, *Where Do We Go from Here*, 50. [猿谷訳『黒人の進む道』、53頁。]

<sup>50</sup> *Ibid.*, 27-28. [同上、30頁。]

<sup>51</sup> Garrow, *Bearing the Cross*, 496-497; *NYT*, July 6, 1966; Cone, *Martin & Malcolm & America*, 229-232. [梶原訳『夢か悪夢か・キング牧師とマルコムX』、314-319頁。]

<sup>52</sup> *NYT*, July 4, 1966.

<sup>53</sup> Linda Bryant Hall Interview in *Voices of Freedom*, 305.

<sup>54</sup> 藤永「シカゴ・フリーダム・ムーヴメント」、21頁。

<sup>55</sup> Harold M. Baron, "Black Powerlessness in Chicago," *Trans-action* 6, no. 1 (November 1968) : 27-33.